

山口県に飼養されるイヌとネコにおける口腔内パストツレラ属菌の 保菌状況とその菌種の特徴ならびに薬剤感受性

富永 潔, 富田正章, 矢端順子, 吉川正俊

山口獣医学雑誌, 33, 25~30(2006)

ヒトのパストツレラ症の主要な感染源であるイヌおよびネコの口腔内に保菌されるパストツレラ属菌の菌種とその保菌率ならびにイヌとネコにおける菌種別保菌率の異同を知る目的で, 2年間(平成14~15年度)にわたり山口県に飼養されるイヌ219頭およびネコ81頭の口腔内からの菌分離を実施した. その結果, パストツレラ属菌の保菌率は, イヌが64.4%, ネコが79.0%と他の人獣共通感染症では認められることのない高い値であった. さらに, 分離された233株の菌種を同定し由来別に集計した結果, イヌに保菌されている最優勢菌種は*P. dagmatis*(Pd) (32.4%)であり, 次いで*P. canis*(Pc) (17.8%), *P. multocida*(Pm) (13.2%), *P. stomatis*(Ps) (9.9%), *P. pneumotropica*(P. pn) (3.7%)であったのに対し, ネコではPmが71.6%と圧倒的最優勢[亜種別ではssp. *multocida*が56.8%, ssp. *septica*が12.3%, ssp. *gallicida*が2.5%]で, 次いでPpn(7.4%), Pd(6.2%), Ps(3.7%)であり, イヌとネコでは菌種の構成比率に大きな違いがあり, 最も分離頻度

が高く病原性も強いとされているPmの保菌率はイヌでは低率であり, ネコでは逆に口腔内パストツレラ属菌のほとんどを占めるほど高率であるという特徴が明らかとなった.

また分離菌株233株の12種類の薬剤に対する感受性は, オキサシリン(MPIPC)が*Pasteurella*属5菌種すべてにおいて78.6~100%の高い耐性率であったほか, アミカシン(AMK)もPm, Pdにおいてそれぞれ10.3%, 11.3%, またナリジクス酸(NA)もPm, Pc, Psにおいてそれぞれ1.1%, 2.6%, 5.9%の耐性率であった. またエリスロマイシン(EM)に対しては耐性は認められなかったものの, 中間(I)の占める割合が5菌種すべてにおいて34.2~96.6%と非常に高く, これらの薬剤の効果は期待できないと考えられたが, その他の8薬剤は全ての菌種が100%感性であり, 高い効果があると考えられた.